

キャンパス通信 ippeki



01 特集/
世界を舞台に
活躍する卒業生

授業紹介

- 03 1年生
- 04 2年生/3年生
- 05 4年生/大学院
- 06 卒業生・修了生紹介
- 07 キャンパス日記
- 08 INTERNATIONAL ACTIVITIES
- 09 看護部長からのメッセージ
- 10 研究室訪問

3年次必修科目「クリティカルケア実習」

クリティカルケア実習では、患者さんの身体を観察するための知識と技術について、より効果的に学習するために、高機能シミュレーターを用いた演習を取り入れています。このようなシミュレーション教育によって、より実践的なレベルの学習が可能となりました。机上の学習と異なり、学生が主となって失敗を学びに変えながら、楽しく学習できます。

第7号
2014.4▶2014.9



ひとりを看る目、その目を世界へ。

 日本赤十字九州国際看護大学
Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

特集



第18回ナースィングキャリアカフェで講演をされた大町さんに取材をしました。

ナースィングキャリアカフェとは、本学が参加する事業（大学間連携共同教育推進事業が行う取組みの一つ）です。同事業では、8つの看護系大学が連携し、折れにくい学生を育成するために「しなやかな使命感を育成する基盤的取組」と「多様な価値を付加する先端的取組」を推進しています。カフェを通じて、卒業生やスペシャリストと交流することで、学生が将来について考える機会となっています。



世界を舞臺に活躍する卒業生

今回は、このナースィングキャリアカフェで講演をされた大町さんに取材をしました。

看護師を目指そうと思ったきっかけ

私が看護師を目指そうと思ったきっかけは、小学生のときにテレビで見た国境なき医師団のドキュメンタリー番組です。そのドキュメンタリー番組は私の中でずっと強く印象に残っており、どうすれば助けを必要としている人の役に立てるような活動ができるのかと考えていました。看護師を目指すために、日本赤十字九州国際看護大学を志望したのは、高校3年生の進路を決める時期、両親が本学のパンフレットを見つけてきてくれたことです。国際救援に憧れていた私は、パンフレットに写っていた、将来、私の恩師となる大学の先生が途上国の子どもたちに笑顔で囲まれている写真を見て強く惹かれ、本学を目指すようになりました。

心から楽しんだ大学時代

国際救援に憧れて入学しましたが、大学生活が本当に楽しく、特にこれといって国際救援に向けて努力した記憶はありませんでした。でも、私の目的に沿った大学を選んだことでチャンスを得る機会にたくさん巡り合いました。今となって思い返してみると、

熊本赤十字病院 看護部手術センター 看護師 大町 麻依さん(学部3期生)

国際看護の授業や国際経験の豊富な先生たちの話など日頃から「国際」を感じる雰囲気がありました。国際救援をするという夢を叶えることのできる環境にいたことが私にとって非常に良かったと思います。

大学の選択科目で行ったタイとラオスでは、途上国の実際を自分の目で見て知り、視野が広がっていく感じがしました。また、ユネスコの学生交流プログラムでスリランカにも行きました。ちょうど2004年に起きたスマトラ島沖地震の復興支援中でもあり、現地で活動する地元赤十字スタッフや日本赤十字社の支援状況も視察することができました。スリランカでの経験を通して、改めて赤十字という組織の大きさと実力を知ることができましたし、国際救援というもののイメージをはっきりと掴むことができました。振り返ると、学生時代は目に見えないものをそのまま受け止め、国際救援とは何なのかと深く考えずに「困っている人は助けなければ」と考えていました。この考え方は今でも変わっていません。



熊本赤十字病院に就職

スリランカで知り合った熊本赤十字病院のスタッフに、同院での国際救援活動の話聞き、興味をもちました。熊本赤十字病院は国内に92ある赤十字病院の中でも国際医療救援拠点病院として全国で5つある施設の中の1つです。進路を決める際、周りの友達や福岡赤十字病院や地元の病院に就職する中で自分だけ違う道に進むことに迷いはありましたが、どうせやるんだからという思いのもと地元から離れた熊本県での就職を決意しました。



看護師として働き始めてからは、社会人として働くことに一生懸命な一方、自分の国際救援への思いを理解し応援してくれる同期や上司に巡り合うことができました。

赤十字国際救援 開発協力要員になるために

派遣要員になるためにはTOEIC 730点以上、国際赤十字のeラーニングの修了、3年間の業務経験などの厳しい条件を突破する必要があります。英語に苦手意識を持っていた私は、毎朝6時に起きて勉強し、病院から帰ってきたら寝るまで勉強するという生活を送りました。また、家の中のあらゆるものに英単語を書いた付箋を貼るなど工夫を凝らし英語を勉強した結果、TOEICで必要以上のスコアを獲得することができました。その後は、ERU研修と国際救援・開発協力要員研修を修了し、ようやく念願の赤十字の海外派遣要員となることができました。研修を通して、国際救援という同じ目標をもった仲間に出会い、モチベーションアップにも繋がりましたし、とても良い刺激をもらいました。

国際救援をするためにはどの団体に所属するのが良いかとの質問をよく受けます。色々な団体があり、それぞれ活動のポリシーは違いますが、私が考える赤十字の大きな強みは、どの国に行っても関連組織があること、災害が起こった際に世界各国から支援をしてもらえること、プロジェクトの目標が明確なので、現場のニーズを知っている派遣員の要望に本社や病院が対応してくれることだと思います。中でも私が一番の強みだと感じる点は、赤十字には人を育てる文化があるということです。赤字での国際救援は、最低でも3年間の実務経験が必須となるため派遣員として海

外に出るまでには長いスパンがかかります。しかし、病院スタッフとして育った上で国際協力ができるため、赤十字のこういった点は一番の強みではないかと感じています。

私は、研修を通じて赤十字の強みを感じ、モチベーションの維持に努めました。そうして遂に、就職して7年目、国際救援をしたいと思いはじめて11年目に海外に派遣されるチャンスを得たのです！

フィリピンへ初めての派遣

その時の派遣の目的は、保健医療状況の改善と地方村落で活動する医療知識をもった保健ボランティアの育成、子どもたちへの衛生促進活動等でした。フィリピンの田舎の山間部では、医療施設が不足しており汚水が垂れ流しの状態のため、下痢や感染症の疾患率が高くなっているのが現状です。そのため、赤十字社が作成したパンフレットを使って手を洗うなどの保健医療知識の普及に努めたり、医療施設や給水システムを建設する手助けをしたりしました。

日本との医療の違いに驚いたこともあり、日本では傷口にガーゼが合わないというところでは勿体ないと言った、必要最小限使うようにしていました。



これから進路を決める皆さんへ

思い返すと、高校・大学と学生時代は本当に楽しいものでした。今でも学生時代の友人には何でも話せますし、私が海外へ行くことが決まった時も友人みんなが喜んでくれました。学生時代には時間もあるし、何かをしたければアルバイトをしてお金を稼ぐこともできます。本を読むことができますし、旅行にも行けます。悩もうと思えばとことん悩む時間がありますし、人とぶつかって喧嘩もできます。私はそんな今を満喫してほしいと思います。

これから皆さんには色々な道やチャンスがあると思います。何になろうか、どこで働こうか、どこに住もうか…など。そんな時こそ、ぜひ自分と向き合ってもらいたいです。明確に「これ！」と答えを出す必要はありません。しかし、何となくでも「こうしたい。こうしたほうがいいんじゃないかな？」ということを自分で導き出せるようになってほしいと思います。そのためには、きちんと自分の声に耳を傾けなければいけません。悩んだ時ほど、人の意見を聞いてしまいがちですが、何となくでも自分の声を聴けるようになってほしいと思います。

車とバイクがぶつかって負傷者が出たときにトリアージをする際、日本とフィリピンでは重症度の判断基準が全く違うことに驚きました。また、村の人が協力して負傷者を救急車（といってもほとんどワゴン車のようなもの）に乗せたのですが、その手荒さに動揺して少し気分が悪くなってしまったこともありました。同じ国の中での医療の差（貧富の差）を目の当たりにし、フィリピンの医療の現状を考えさせられる体験でした。

また、言葉はツールという風によく言われます。フィリピンでは英語とタガログ語が公用語です。「言葉」というツールがないと自分の気持ちは伝わらないこともあるということをしみじみと感じました。会議や電話では英語が使われるため、聞き取れなかったところはメモして後で周りの人に聞いたり、電話では聞き取ったことが正しいか相手に確認したりすることを徹底しました。現地の人とのコミュニケーションでは、模造紙を縦に3つに分け、左側に日本語、中央に英語、右側にタガログ語の単語を書くポスターを作成しました。私が英語と日本語欄に単語を書くとき、現地の人がタガログ語欄に単語を書き込んでくれるという仕組みです。現地の人が日本語を知りたいがために英語欄にどんな単語が書き足されていきました。ある時自分の部屋に行く扉に「こんにちは」と書かれた紙が貼ってあったことがあり、とても嬉しかったです。フィリピンへの派遣の経験を通して、知らない土地で知らない人と働き、改めて自分を分かってもらえることの大切さを知ることができました。

1 <http://www.kumamoto-med.jrc.or.jp/special/international/mission/>

2 緊急対応ユニット(Emergency Respond Unit)緊急事態および大規模災害に備え、緊急出動が可能な訓練された専門家チームを育成するための研修

3 国際赤十字のeラーニングで習得した理論をもとに、海外で派遣された際の職務を全うするために必要な国際救援・開発協力の実践的知識・技術を習得する研修

4 災害時など非常事態に陥った状況で一人でも多くの傷病者に対して最善の処置を施すために傷病の緊急度や重症度に応じて4段階に分類し優先順位をつけること



授業紹介

フィールド体験実習に行きました。

1年生

先生の声

フィールド体験実習は、1年生にとっては大学に入って初めての病院実習です。実習に向けた説明を行うと、学生は目を輝かせながら話を聞いていました。学生に気持ちを聞くと「緊張する」「楽しみ」等、期待と不安を抱いていることを思わせる発言をしながらも、実習に向けた準備を頑張っていました。そして、実習が始まると緊張した表情でしたが、看護職の方々の実際の仕事を見たり、看護の一部を体験したりすることで、楽しさと真剣さの入り混じった一生懸命な表情に変化していました。実習後も興奮した様子で、「色々なことが学べた」「もっと勉強しないといけない」などの言葉が聞かれ、様々な刺激を受けたようでした。今回の実習を通して学生たちは、多くの看護の実際を見学し、インタビューをさせていただいたことで、自分の将来像を考える機会になったようでした。

記: 看護の基盤領域 助教 小手川 良江、講師 阿部 オリエ



学生の声

私は、大学の看護教員と病院の看護師という2つの看護職者を対象に実習を行いました。そして、この2つの看護職者に共通して必要な力である「多重課題解決力」に着目しました。大学の看護教員は大学の学生を対象に看護教育を行い、一方、医療現場の看護師は患者へ看護ケアを行う中で、両者ともいくつかの仕事を同時に行う場面が多く見受けられました。

病院では一人の看護師につきその日に受け持つ患者は複数います。その中には同じ時間に複数の患者に処置やケアを行う場合もあります。しかし、どの患者にも平等にかつ確実に処置やケアを行う必要があり、このような時に多重課題解決力が求められていました。これらを見て、多重課題を解決するには以下の点が重要になると考えました。まず目的、目標を明確にすること、そして順序を立てて効率良く、また、確実に出来るよう十分考えること、さらに他の看護師やチームの協力を得ることです。今回の実習を通して、患者と接する時は業務が忙しいということを患者さんに意識させず、一人一人に心のこもった対応、コミュニケーションができる看護師を、私の看護師の理想像として描くことができました。



記: 1年生 水城 萌

看護過程の展開実習に行きました。

2年生

私たち2年生は二週間の看護過程の展開実習に行ってきました。初めは、一人の患者さんを受け持ち看護すること、コミュニケーションをとることへの不安が大きく、とても緊張していました。しかし、臨床(病院)の看護師さんやグループメンバー、先生に支えられ実習を有意義なものにすることができました。

実習中に、特に私が苦手だと感じたのは個別性を意識することです。病気は同じでも一人ひとりの置かれている状況は大きく異なります。病気ではなく、その人を見るということが想像以上に難しかったです。

技術面では、学生同士で練習する際には得られないような生きた反応が返ってくるため非常に勉強になりました。足浴を連日行った患者さんからは、「足浴をしてもらった日は身体がぼかぼかしてよく眠れる。」「足の痒みもだいぶよくなったよ。」などと言ってもらうことができ、とても嬉しかったです。

今回の実習で見つけた課題を少しでも解決し次の実習へ繋げられるよう、日頃の講義や実技の練習など気を引き締めて取り組みたいと思います。



記: 2年生 高田 有里

3年次選択科目「国際保健・看護Ⅱ」でベトナム海外研修を行いました。

3年生

先生の声

3年生20名は、8月2日から9日まで、「水と健康」を研修テーマに、ベトナム社会主義共和国を訪問しました。ベトナム赤十字社と日本赤十字社が共同で実施している災害対策事業の見学、ナムディン看護大学(本国国際交流協定大学)での合同講義と演習、保健省の病院や地域のクリニックでの実習を行いました。事前学習をして研修に臨んでいましたが、実際に見て体験することで、新たな発見と経験ができたようでした。帰国後は研修での学びを考察しながら、日本の保健医療や看護を見つめなおしているようです。

記: 国際・災害看護領域 准教授 小川 里美、准教授 森山 ますみ
事務局学務課 江副 真理子



学生の声

今回の研修では、ベトナム赤十字社を始め、ナムディン看護大学とその関連施設を訪問しました。台風の被害対策として植林されたマングローブ地帯も訪問しました。そこでは、マングローブの役割を学び、住民の生活と地域の活性化を目指して地域全体で取り組む、マングローブの植林を継続するという事業の重要性を知ることができました。ナムディン看護大学では、言語の壁を乗り越えてテーマディスカッションと合同演習を行いました。また、病院実習では、実際に患者さんにケアを実施する機会をいただき、寝衣交換や清拭を行いました(右上写真)。日本と同じように対象者の安全に配慮し、効果的な看護ケアを提供するという経験をでき、文化は違っても看護は共通であることを実感しました。今後は、国際レベルの広い視野を持った看護師になれるよう努力したいと思います。

記: 3年生 徳永 純

第2回就職活動セミナー(面接訓練)を行いました。

4年生

本学では4年生を対象に、就職活動セミナーを定期的に開催しています。2月の第1回就職活動セミナー(導入)に続き、今回は福岡県若者しごとサポートセンターから講師をお招きして面接対策を行いました。



面接は個人面接と集団面接、グループディスカッションが主体ですが、近年ではグループワークなどがあるとのことでした。面接というと、漠然とただ自己PRすれば良いのでは?という思い込みがありました。しかし、面接の手法によって、面接官がチェックしているポイントが異なること、実際に面接官は受験者のどこを、何の目的で見ているのかなど、具体的なポイントを教えていただきました。特に複数で行う面接の場合、自分だけが目立てば良いだけではなく、他の受験者との協調性や親和性、チームワークが非常に重要であることを学びました。

講義後、これらのポイントを踏まえ、私を含む5名の学生が模擬集団面接を受けました。あらかじめ志望動機や自己PR、質問に対する回答を準備して臨みましたが、緊張と不慣れさから言葉が詰まったり、尊敬語や謙譲語の区別ができなかったり、普段の口癖が思わず出てしまったりと自分の考えを上手く伝えることができませんでした。その緊張感は、周りの学生にも伝わり、参加者全員が真剣な面持ちで私達のやりとりを見つめていました。

今回のセミナーでは、模擬面接を通して改善点が見つかっただけでなく、自己分析を行って自分をより客観的に知ることが重要であるということも学びました。そして、面接は自己PRの絶好の機会ですので、漠然と話すのではなく、面接官に印象付けたい内容をよく考えて話すことが重要だと実感しました。

これから私たち4年生は、看護職としての将来像を見据えた就職活動を行っていく時期に入ります。このような機会を通して、全員が第一志望の病院に合格できるよう、より一層の努力をしていきたいと思いました。

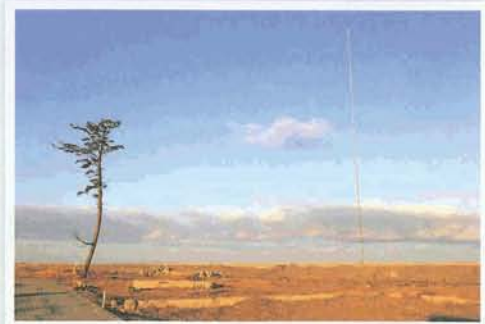
記: 4年生 岩見 隆

福島県南相馬市での学び

— 複雑さから逃げずに考え続け、希望を見出すこと —

大 学院

私は修士論文として福島第一原発事故後の看護をまとめるにあたり、現場を知る必要があると考え、昨年度、大学院を休学し福島県南相馬市内の病院で勤務しました。同市は東日本大震災により県下最大の被害を受けています。震災後、人口が減少し少子高齢化が進行した姿は、20年後の日本の縮図といわれています。



病院では外来勤務に加えて、救急看護の経験を活用し、「急変時の看護」や、市内中学生の職場体験で救急看護の講義等を行いました。院外ではボランティア活動や、原子力災害関連のセミナー及び、災害看護関連の学会に参加しました。

私は南相馬で二つのプレゼントをいただきました。一つ目は看護師さんとの信頼関係です。文化や歴史を知った上で共に働き、本音で語るにより信頼関係を構築できたと思います。二つ目は新しい考え方です。震災による被害は個別的かつ複雑です。しかし、複雑さから逃げずに考え続け、人との出会いから力を得て、新しい生き方を模索している方々がいらっしゃいます。考え抜いて、希望を見出すという考え方を教わりました。しかし、南相馬の復興には多くの課題があります。看護職は看護師不足の解消と、遷延している不安に対応する必要があります。課題を分析して、解決策を模索し修士論文としてまとめたいと考えています。



記: 大学院修士課程 2012年入学 柴田 幸子

卒業生・修了生紹介

橋爪 亜希さん

2006年 看護学部修了
日本赤十字九州国際看護大学 助手

2006年に二期生として本学を卒業し、武蔵野赤十字病院で助産師として勤務した後、2010年にオレゴン州立大学の公衆衛生修士課程に入学しました。私は、国際看護学をはじめとし、大学時代の多くの経験や学びから、途上国といわれている国々で母子保健に従事したいと思うようになりました。アメリカで、専門分野を英語で学び、様々な文化的背景を持った人々との交流を持つことができたことは、将来の国際活動に大いに役立つと思います。今は、母校に戻り、これまでの学びを深めながら、後輩でもある学生が広い視野を持った専門職者なれるように教員としてサポートしています。

Michiyo Takao 高尾 実千代さん

2011年 大学院看護学研究科修了
沖縄赤十字病院
看護師長・医療安全推進室 専従リスクマネージャー

私は国際救援活動に参加したなかで抱いた問いの答えを求め、本学大学院で「世界の健康危機」を専攻しました。経験豊かな先生方の一言ひとことに知的好奇心は一層刺激され、また各自の学習ニーズに応じ、有機的につながる他の領域を横断的に学ぶことができ、学びは広がり多角的な視点から課題に取り組むことができました。自ら学んでいくことで研究の第一歩を踏み出せたと実感するとともに、学び続けることの大切さをあらためて認識しました。今は本学大学院で学んだ意義をかみ締め、期待される役割を果たしていけるよう努力しています。すべての人が希望をもって生きられるよう、想像力と理解力をもって、国際的視野をもって思考し、地域で行動を起こしていきたいと考えています。



CAMPUS DIARY

学生による、 Dewey the Library Catの 翻訳が冊子になりました

4/4

1年生後期の必修科目「英語Ⅱ」において、因教授のクラスの28名が、読解課題 *Dewey the Library Cat* を翻訳し一冊にまとめました。

本書は、*Dewey's Nine Lives*という全米でベストセラーとなった本を年少の読者向けに翻案したもので、市立図書館を住処としていた猫のDeweyと町の人々とのかわりが描かれています。物語には、人の心身を癒すことを職業に選んだ者にとって深い意味を持つ示唆が多く含まれています。28名の汗を集めた冊子の表紙はクラスの一人佐藤さんの描いた猫の挿画で飾られています。図書館のカウンター近くのコーナーにおいてあり、もちろん原書も図書館に備えられています。ぜひ手に取って、Deweyの愛らしさに触れ、現在は2年生となった28名の奮闘ぶりをご覧ください。



春・夏の主なできごと

3年生を対象にデータベースのガイダンスを実施しました

3年生前期の必修科目「看護研究方法」に関連し、文献検索のための4つのデータベースのガイダンスを実施しました。このガイダンスでは、授業で提示された課題に即して、効率よく検索できるキーワードの使い方や組み合わせ方、検索結果の絞り込み方法等を演習形式で説明します。

ガイダンス後は、3年生から、検索の方法について質問が寄せられています。グループごとに熱心に課題に取り組む様子も見られ、図書館職員も随時アドバイスをしています。

今後もぜひデータベースを活用して、レポートや4年次の卒業研究のための情報収集に役立ててほしいです!

5/7~8



宗像市の24時間EKIDENに参加しました

5/10~11

沖縄の伝統芸能エイサーを踊るサークル「ゆいまーのわ」のメンバー(24名)を含む本学学生29名は、5月に宗像市で行われた「宗像ユリックス24時間EKIDEN」に参加しました。

この駅伝は、初日の午後1時から翌日の午後1時まで、24時間かけて襷を繋ぎ、走るというものです。この行事に参加し、チームワークの大切さや完走の達成感を味わい、さらに、夕日の差す中、エイサーの演技を披露して会場一体となる感動を味わうこともできました。

また、大学名の入ったTシャツを着用し、大学のテントを張り、本学の広報にも貢献できたのではないかと思います。多くの先生方に差し入れ等の支援もしていただき感謝しています。来年もまた、出場すると後輩が張り切っておりますので、是非、応援をお願いします!



ランチョンミーティングにて 「ビブリオバトル」を開催しました

7/7

ビブリオバトルとは、出場者がすすめる本の魅力を5分間で語り、どの本が一番読みたくなったかを基準に投票を行う大会で、大学生参加の大会が毎年1回、全国規模で行われています。

今回、ランチョンミーティングにて開催した学内ビブリオバトルには1年生から4年生まで、5名の学生が出場し、それぞれに本の魅力を熱く語ってくれました。

投票の結果、見事チャンプ本となったのは、2年生の鹿子島さんが「今期読んだ中で最高に面白い」と絶賛のフランスの小説『ワニの黄色い目』でした。

会の最後に、因図書館長から「人に伝えたい。人から話を聞きたい」という純粋な気持ちが奥にあることが大事。ビブリオバトルは、そういう気持ちをストレートに前面に出せる機会なのです。今後もぜひ参加してほしい」との講評をいただきました。



写真左から
3年生 東明穂さん、1年生 吉田恵さん、4年生 吉田ももさん、
2年生 木原如季子さん、2年生 鹿子島惇さん

INTERNATIONAL ACTIVITIES

インドネシア国立アイルランガ大学 看護学部短期留学

本学の8番目の国際交流協定校であるインドネシア国立アイルランガ大学看護学部で、実習教育を中心とした学生・教員の短期留学プログラムに本学3年生の藤井紗也さんと大塚亜沙子助手が8月16日から参加しました。同大学で、3日間の実習に参加した大塚助手から帰国後の報告をいただきました。

現地では、全教員と医療関係者が私たち2人を温かく迎えてくださり、日本とは異なるインドネシアの看護や文化を日々学ぶことで、さらに異文化を学ぶ意欲が掻き立てられました。

実習1日目は大学の教育体制についてオリエンテーションしていただき、保健師と助産師は大学院での教育とのことで、日本が今後進んでいる教育をすでに実施していると感じました。

実習2日目の午前中はブスケマス母子サービスセンターを訪問し、助産師が1つの地区を担当し、ハイリスク妊産婦を管理する母子保健活動の取り組みを学びました。また、コミュニティヘルスケアセンターでは日本よりも頻りに乳幼児健診が行われていて、体重の発育曲線に従った栄養指導や助産師による育児相談により、母子共に心身の健康が守られていることを実感しました。

実習2日目の午後からはゲストレクチャーとして日本の性教育についてアイルランガ大学5年生の約60名に講義をさせていただきました。本学のサークルオブピア活動として小学校での健康教育を紹介し、学生たちは興味深く真剣に話を聞いていました。インドネシアでは性教育はタブーとされており、親も積極的に行わない現状があります。このような状況だからこそピアによる正しい性知識の理解が若者に必要になると思い、今回の私たちの話は有益になるのではないかと考えています。

実習3日目は実習施設であるソエトモ病院の産婦人科病棟を見学し、看護師・助産師の業務を見学し、インドネシアにおける周産期医療や現状について学びました。

私が帰国後も藤井さんは実習を続けており、入院患者とコミュニケーションを図りながら、ソエトモ病院での産婦人科外来や分娩室、精神病院、ハンセン病病院を訪問し、病院での看護師・助産師の役割について学んでいます。藤井さんは今後のクリティカル実習で特に日本で重要視されているプライバシーの保護や個別性の看護、evidence based nursingについて学んでいく予定です。

今回のプログラムを通して、日本とは違うインドネシア人の柔軟な姿勢と細やかな看護を学ぶと同時に、人口が増え続けていく中で看護の質を保つための懸命な努力を間近に見ることができ、今後は私自身日本だけでなく世界の人の健康と教育の発展に真摯に努力したいと思います。10月にはアイルランガ大学から教員と学生が本学を訪れることになっており、楽しみにしています。

記：成育看護領域 助手 大塚 亜沙子



写真左から2番目 3年生 藤井紗也さん、写真中央 大塚亜沙子助手



米国聖アンソニー看護大学との交流協定の調印および「第3回国際フォーラム」の開催

本学としては9番目の、米国の大学とは初めての国際交流協定校の調印式を行いました。本学を代表して浦田学長から、「同じ博愛の精神のもとに建学された両大学が、今回の協定に基づき、大学間の教育・研究を通じて、相互にグローバルな知識と体験が得られる機会を学生や教員に提供することができれば」と、今後の交流発展を大いに期待する旨のあいさつがありました。聖アンソニー看護大学のエリザベス・カーソン学部長からは、「是非、米国の看護大学に来ていただき直に米国の看護に触れ、多様な看護のあり方と可能性を学んでいきたい」と、昨年からはまった日本の看護師、看護教育者を対象とした同大学の夏季研修プログラムが提示されました。

調印式の後に開催した、今回で3回目となる「国際フォーラム」では、米国イリノイ州の聖アンソニー看護大学のカーソン学部長をはじめ、リンダ・マティソン先生、ディナ・ダーモディー先生、通訳兼解説者として竹熊カツマタ麻子先生の4名の先生方による講演が行われました。日本の看護職者にとって、極めて興味深いテーマの講演であり、当日は学外からの参会者を含め、約50名近くの看護職者、教員・学生の参加がありました。

記：国際看護実践研究センター センター長・教授 五十嵐 清



看護部長からのメッセージ

わたしたちと一緒に赤十字の未来をつくりましょう。



沖繩赤十字病院
看護部長
水田 厚子

沖繩赤十字病院は、平成22年7月、県庁所在地である那覇市の中心地近くに新築移転、ICU、HCU、無菌室等を新設しました。「赤十字の博愛の心が伝わる病院をめざして」を病院理念とし、地域から信頼される急性期病院をめざし平成25年度に地域医療支援病院の承認を受けました。施設完結型の医療から地域完結型の医療への転換が進められる中、地域との連携がますます重要になってきました。看護部では、その人がその人らしく生活できるために「人」に寄り添う看護をめざし、地域と連携して患者様が安心して生活できるような療養支援を優先課題として取り組んでいるところです。

看護師の育成についても、患者、家族の思いに気づける実践者を目標とし、教える側と学ぶ側の両者が共に成長できる職場風土、「みんな育てる」という意識の醸成に向けて後進育成に取り組んでいます。日々の看護実践はもちろん、新人教育においても赤十字の基本原則である「人道」に基づき、「ひと自分も大切にすること」を意識することが重要であり、そのことが「ひとりひとりが大切にされている」と思える活気ある職場、質の高い医療の提供に繋がると考えています。



鹿児島
赤十字病院
看護部長
三池 末女

鹿児島赤十字病院は、鹿児島市の南部に位置し、錦江湾に面した自然環境豊かな120床の病院です。本院は、創設90年を迎えました。「小さいながらも楽しい我が家」として、顔の見える関係でチーム医療を実践しています。「わたしたちは、人道・博愛の赤十字精神に基づき、心のこもった医療を提供します。」の理念をもとに質の高い医療を目指す他、離島・へき地医療の中核病院としての機能・災害救護の充実に積極的に取り組んでいます。殊にリウマチ膠原病センターとしてトータルケアを行っており、看護師の役割も重要です。看護部では、「あったかい看護の提供、気づき・考え・行動しよう」を目標にしており、「いざ」という時の赤十字」として人々のお役に立てるよう日々研さんしています。

学生時代は様々なことにチャレンジできる貴重な時間です。人と人とのつながりを大切にし、コミュニケーションスキルを高め、そして考える力を身につけていただきたいと思います。また、鹿児島市ならでの離島診療の実際を学ぶため、三島村・十島村にも赴かれ、好評を博しております。是非お越しください。



ベトナム ナムディン看護大学講師 Vu Thi Hong Nhung氏(ニユンさん)が大学院研究科の研究生として入学しました!

今年4月に国際交流協定校、ナムディン看護大学講師Vu Thi Hong Nhung氏(ニユンさん)が研究生として来日しました。ニユンさんは2013年に奨学金を取得し、大阪で日本語学校に通いながら、介護施設で15ヶ月働いた経験を持っています。ベトナムでは老年看護教育はまだ発展していないため、来日当時、ニユンさんは老年看護と介護の区別がよく理解できませんでした。

しかし、ベトナム社会も高齢化が進展しており、今後の課題として対応を考えていく必要があります。ニユンさんは本学で日本における老年看護・介護というテーマを深めたいと、本学大学院研究生プログラムに応募しました。指導者となる本学の姫野穂子教授、原田紀美枝助教とインターネットを介して何度か話をして研究の概要を決めました。

日本における看護教育カリキュラムと老年看護の教育について資料の収集をしたり、介護職の歴史や教育内容・資格について調べたりしながら老年看護の実習施設(病院・老人ホームなど)を見学し、本学の老年看護などの講義や演習、教授法に焦点を当てて参加しました。ベトナムでは先生が学生に教えるスタイルが一般的ですが、日本では学生に疑問を投げかけ、考えさせようとするところが大きな違いとして印象に残ったようです。

9月30日にニユンさんの研究期間が終了します。終了前に、学生へメッセージをお願いしたところ、皆さんに次の言葉を残してくれました。

Học, học nữa, học mãi (ベトナム語で「勉強に終わりはない。」= 皆さん、勉強し続けてください。)

ニユンさん、ベトナムに帰っても頑張ってください。私たちが頑張ります。

メッセージをありがとう。Xin Cám On!



記: 広報委員 エレラ・ルルデス

平成25年度 進路状況 (卒業生127人) 看護師/120人・保健師/1人・進学等/6人

平成25年度 決算報告 (平成25年4月1日～平成26年3月31日)

(単位:円)

【消費収入の部】

科目	予算	決算	差異	備考
学生生徒等納付金	771,900,000	743,885,000	28,015,000	学生授業料他
手数料	15,283,000	13,794,540	1,488,460	入学検定料他
寄付金	5,963,000	2,474,667	3,488,333	寄贈図書他
補助金	96,707,000	116,186,433	△19,479,433	経常費補助金他
資産運用収入	15,080,000	12,603,078	2,476,922	受取利息
資産売却差額	0	1,098,206	△1,098,206	有価証券売却差額
事業収入	35,916,000	30,150,218	5,765,782	認定看護師養成教育事業収入他
雑収入	6,660,000	7,710,992	△1,050,992	科研費補助金間接経費他
内部取引	2,487,000	203,115,474	△200,628,474	
帰属収入合計	949,996,000	1,131,018,608	△181,022,608	
基本金組入額合計	△1,921,000	△10,500,231	8,579,231	
消費収入の部合計	948,075,000	1,120,518,377	△172,443,377	

(単位:円)

【消費支出の部】

科目	予算	決算	差異	備考
人件費	554,752,000	538,744,595	16,007,405	教職員人件費
教育研究経費	332,458,000	306,319,276	26,138,724	教育経費
管理経費	45,252,000	35,648,980	9,603,020	管理経費
資産処分差額	0	125,615	△125,615	教育研究用備品他の処分差額
内部取引	13,970,000	216,449,111	△202,479,111	
消費支出の部合計	946,432,000	1,097,287,577	△150,855,577	
当年度消費収入超過額	1,643,000	23,230,800		
前年度繰越消費収入超過額	496,403,000	485,306,520		
翌年度繰越消費収入超過額	498,046,000	508,537,320		

ランチオンミーティング開催状況

	月日	講師		テーマ
第1回	4月21日	松尾依実、宮城由佳(4年)	本学学生	国際保健・看護Ⅱ 海外研修報告 家族愛にあふれる国～変わっていくものと変わらないもの～ ベトナムから学んだこと
第2回	5月19日	時枝夏子 助手	本学教員	Child Life and Family-Centered-Care ～子どもらしく生き抜くためのケア～
第3回	6月26日	Lee Geun Hyong 氏 藤井紗也(3年)	牧園大学校学生 本学学生	韓国短期研修 ～韓国の若者、日本の若者～ お互い学んだこと
第4回	7月 2日	五十嵐清 国際看護実践研究センター長 橋爪亜希 助手	本学教員	聖アンソニー看護大学訪問の報告
第5回	7月 7日	吉田恵(1年)、鹿子島惇、木原如季子(2年)、 東 明穂(3年)、吉田もも(4年)	本学学生	知的書評合戦 ビブリオバトル
第6回	9月30日	Vu Thi Hong Nhung氏	ナムディン看護大学講師	日本の老年看護教育

研究室 訪問



私の研究室は教育学の著書であふれています。それもそのはず。専門は、看護を担う人材育成について探究する看護教育学です。なじみがないかもしれませんが、実は学生の皆さんの学びそのものを研究対象にする分野でもあるのです。

私がこの分野に興味を持ったのは、患者さんに関わる「看護」と、学習者に関わる「教育」に多くの共通点と面白みを発見した事にあります。どちらも個性豊かな人を相手にします。そのため、その人をどう捉え関わっていくかが、その後の変化に大きく影響します。簡単な事ではありません。「看護」を「教育」する「看護教育」には、二重の意味での難しさや面白さがあるのです。

今、行っている研究は、ベテランの看護師がいつの間にか身につけている実践知を研究対象にしています。経験を積み重ねてしか得られない実践知を解明し、その知識の獲得過程を丁寧に抽出し、モデルとして示すことを目指しています。ベテラン看護師は教科書に載っていない、日常で自然に使っている知識を実はたくさん持っているのです。それらを目に見える言葉として表現する事で、看護学を学ぶ学生さんにも、看護の奥深さを伝えたいと思っています。研究の成果は授業で取りあげていきます。お楽しみに。

基礎看護学領域 教授
本田多美枝 先生



ノンアルコールで歓迎会

学内飲酒規制 3割超に

NPOが大学初調査

福岡県学生生活支援NPO「学生生活支援センター」が、県内の大学・短大・専門学校を対象に、学内での飲酒規制の有無や実施状況について調査した。調査結果によると、学内での飲酒規制を実施している大学・短大・専門学校は、全体の3割を超えている。また、規制の内容も多岐にわたっており、飲酒禁止だけでなく、飲酒会の開催を禁止しているところも少なくない。調査は、今年4月に実施された。対象は、県内の大学・短大・専門学校で、計15校。調査結果は、5月にまとめた。規制の有無や実施状況は、以下の通り。規制の内容も多岐にわたっており、飲酒禁止だけでなく、飲酒会の開催を禁止しているところも少なくない。調査は、今年4月に実施された。対象は、県内の大学・短大・専門学校で、計15校。調査結果は、5月にまとめた。

警察が学生に危険性説明

福岡県警は、県内の大学・短大・専門学校を対象に、学内での飲酒規制の有無や実施状況について調査した。調査結果によると、学内での飲酒規制を実施している大学・短大・専門学校は、全体の3割を超えている。また、規制の内容も多岐にわたっており、飲酒禁止だけでなく、飲酒会の開催を禁止しているところも少なくない。調査は、今年4月に実施された。対象は、県内の大学・短大・専門学校で、計15校。調査結果は、5月にまとめた。

4月18日 毎日新聞夕刊

学内飲酒規制

本学の取り組み「ノンアルコールで歓迎会」



使用済み紙おむつを土壌改良剤に

福岡市で綿花大作戦 大学生ら種まき

綿花の種を播く大学生たち

4月27日 西日本新聞朝刊

福岡市イベント「綿花大作戦」に参加 使用済み紙おむつを土壌改良材に



「中根」の目 小規模大就職率1位 聖路加国際大

データが語る

就職率が高い大学 (卒業生100人以上1000人未満) 順位 大学名(所在地) 就職率(%) 1◎聖路加国際大(東京) 100.0 2 千葉国立保健医療大(千葉) 98.9 3◎豊田工業大(愛知) 98.7 4 富山県立大(富山) 98.6 5△浜松医科大学(静岡) 98.4 6◎関西看護医療大(兵庫) 98.0 7◎明治薬科大(東京) 97.95 8△長岡技術科学大(新潟) 97.84 9◎群馬パース大(群馬) 97.76 10◎日本赤十字九州国際看護大(福岡) 97.6 *就職率は就職者数÷[卒業(終了)者数-大学院進学者数]×100で算出。△は国立、◎は私立、無印は公立

前回(7月29日)は卒業生1000人以上の大学における今春の就職率を紹介したが、今回は卒業生100人以上1000人未満の小規模大についてみてみよう。調査は週刊「サンデー毎日」と大学通信が5~7月に共同で行った。表の通り、どの大学も就職率が高い。聖路加国際大は100%、10位の日本赤十字九州国際看護大でも97.6%で、看護や薬科など医療系の大学が7校を占める。また、豊田工業大、富山県立大、長岡技術科学大の3校は、いずれも工科大の単科大。この系統は中・大規模大でも就職率が高いが、注目したいのは豊田工業大だ。設立母体がトヨタ自動車、同社や、その関連企業への就職者は全体の半数を超える。小規模大は総合大に比べて知名度こそ低いが、きめ細かな支援が高い就職率につながっている。【サンデー毎日編集部・中根正義】

8月12日 毎日新聞朝刊

サンデー毎日新聞調査

小規模大就職率トップ10入り!



大学を囲む、宗像の海・山・空をイメージし、水と空が一続きになって一様に青々としていることを表す四字熟語「水天一碧」から名付けられました。

「碧」は、同窓会「暹碧会」の字のひとつでもあり、本紙を通じて、学生・保護者・OG・OBの皆様と大学とが一続きにつながって欲しいとの願いが込められています。

題字：4年生 吉田 歩さん/福岡県・柏陵高校出身

日本赤十字九州国際看護大学 Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

発行：日本赤十字九州国際看護大学 広報委員会

〒811-4157 福岡県宗像市アスティ1丁目1番地

Tel.0940-35-7001 Fax.0940-35-7021

http://www.jrckicn.ac.jp/

寄付のお願い

本学では、個人・法人の方からのご寄付を募集しています。寄付金には、一定の税制上の優遇措置が受けられます。詳しくは、本学ホームページでご確認をお願いいたします。